

---

# 戦艦石鎚の人々

桜木文治

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦艦石鎚の人々

### 【Nコード】

N3521Z

### 【作者名】

桜木文治

### 【あらすじ】

もしも史実じゃご破算になっていた第二次倫敦条約が締結されていたとしたら？

そこで誕生した一隻の戦艦。

そこに乗り込むことになった一人の少女士官を主人公とする、乗組員たちの物語

プロローグ 戦場で恋人のことについて考えるのは死亡フラグだと思うんだ(前)  
初めての方々には初めまして。  
そうじゃない方はお久しぶりです。

なんかもしも第二次倫敦条約を日本が結んでいたら？と言う電波を受信してしまいましたので勢いで作ってみましたww

かなり電波な作品になっているようですが、どうかよろしくお願ひ  
しますm(・・)(m

## プロローグ 戦場で恋人のことについて考えるのは死亡フラグだと思うんだ

プロローグ：戦場で恋人について語ったらそれは死亡フラグだと思うんだ

1942年7月19日 ガダルカナル島ヘンダーソン飛行場

滑走路を眺め眺めながら、アメリカ陸軍航空隊のウィリアム・ローパー少尉は煙草を吸っていた。彼が故国からこの南太平洋の外れに着てから3ヶ月が経過していた。それまでに彼は連日のようにこの島の上空に攻め込んでくる日本海軍の戦闘機を相手にp-38双発戦闘機を駆って戦っており、すでに2機の爆撃機を撃墜している。

「もうすぐだよ、ジェシー」

彼は手元にある写真を見つめながら呟いた。

もうあと3日。それだけ生きていたら自分は二ヶ月の休暇を得ることが内定している。

彼はそれを使って本国の恋人の元に行こうと考えていた。

もうすぐ、もうすぐなんだ。

そうすれば……

そのとき、遠くの方でドーン！という音が聞こえた気がした。

なんだろう……？

そう思いながら空を見上げた時。

急に空が昼間のように明るくなった。

照明弾！？

と、なると次に来るもので考えられることは一つしかない。

砲撃だ！

3ヶ月前の艦砲射撃では運よく生き残ることが出来たが、今度はどうなるかわかったもんじやない

兎に角逃げないと！こんな所で死んでたまるか！

そう思って駆け出そうとした次の瞬間、目の前にいきなり火柱が天高く立ち上り、ウィリアム中尉の意識は暗転した。

彼は予定よりも3日も早く「休暇」を永遠にゲットすることが出来たのだった……。

\*\*\*\*\*

同日同時刻 或る船のブリッジ

数人の人間が双眼鏡で火柱の立ち上った島を眺めていた。

戦艦石鋌艦長の清河直哉大佐はにやりと微笑むと威勢よく命令を下した。

「ん、こつちからでも見えるよ。ドンドン行こうか。砲術長！」

「了解。思いつきり掘ってやりますよ・・・錨頭2下げ、昇角そのまま！思いつきり掘ってやれ！」

妙にガタイの良い男の命令の元、船に備え付けられていた45口径35・6センチ砲を持つ3機の巨大な3連装砲塔がググツと動き、直後に空に向けられた9本の筒の先からまばゆい光を轟音と共に放った。

そして再び島から巨大な火柱が上がる。

再びの歓声

「しかし、まさか柳の下にもう一匹ドジョウがいたとは・・・」

「まあ、冷や汗物だけど成功したんだから結果オーライだね。」

この日、ガダルカナルの島は再び炎に包まれた。

これにより、再び中部ソロモン上空の制空権は混沌としていくことになるだろう。

勝つか負けるか・・・それは航空隊の奮戦しだいだった。

燃え盛る島を見る乗員達の湧き立つ声を聞きながら、清河はポツリ

とボヤいた。

「はあ・・・何でこうなったんだろうな・・・？」

彼の疑問の先は今から7年ほど前の1933年までさかのぼることになる・・・

プロローグ 戦場で恋人のことについて考えるのは死亡フラグだと思うんだ(後

・・・大体こんな感じですよ。

ちなみに主人公は大分後になってから出て来ます。

暫くは主人公と関係のない話が続く予定です。

## 造船ヲタ達の憂鬱

1935年12月、日本海軍に衝撃が走った  
時の今上帝が第二次倫敦条約の締結を決定したのだ。

ちなみに第二次倫敦軍縮条約とは、簡単に説明すると1922年に締結されたワシントン海軍軍縮条約の園長のようなもので、艦齡が20年以上経過した戦艦の代艦の建造を認めるが、そのスペックを加盟した各国に通達すること、基準排水量は35000トン以内、搭載火砲の上限は14インチ砲。などの多くの縛りがあった。ただし、1937年のエイプリルフルまでにこの条約に参加しない国があつた場合はエスカレーター条項というものを発動し一回り巨大な16インチ砲を搭載できると言うものだった。

当時、日本海軍はその条約を締結しない《・・・》ことを前提としてマル3計画と呼ばれる基準排水量6万トン以上、18インチ砲装備の戦艦の建造を含む艦艇の建造を計画していた。それが突然ご破算になつたのだ。

当然軍部は荒れた。  
馱菓子菓子、この国の最高トップの決断に誰も逆らうことなど出来なかつた。

ついでにいうなれば、政財界はこの決断にホツとしていた。  
折角大恐慌から一時的に抜け出すことが出来て経済的に一息つくことが出来たのに、ここでまた軍拡によつて金を使われてはたまつたものではなかつたからだ。

ついでに、最近やけに調子に乗っている軍部に対する枷をつけることが出来たことも理由の一つだったりする。

これにより、大日本帝国は艦艇建造予算を少しだけ圧縮することが出来、その資金を民需用に振り分けることが出来た。

さて、ここで問題になったのは先に言った代艦建造についてであった。

諸外国との対抗上、新たな戦艦は造らざるを得なかった。

艦政本部こと造船ヲタ共のオフ会

「チツ、折角18インチ砲の搭載艦作ることができると思ったのにまたポシヤリやがった！折角図面引いたのに」

「こうなると、マル3は無理だな」

「やるとしても条約期限の昭和17年まで無理」

「頭いてエww」

「仕方ないよ……。」

「上はなんていつてきてるの？」

「取り敢えず早いところ建造計画を作れ……だと。それも、できるだけ安くて早く出来て且つ使える戦艦ときた。」

「安い、早い、使える……って、それ何処の出前だよww」

「軍上層部も無茶言つなww」

「取り敢えず建造するのは金剛型の代艦だな。もういい加減にしないと……あちこちガタが来てるぞアレ？」

「まあ、金剛型の近代化改装をキャンセルしても他のがあるから使えるドック数は決まっているからな。今のところは一つしか開いてないよ」

「色々と面倒だが、まあ仕方あるまい。それに、いずれ建造することになるだろうモノホンの新型戦艦のテストベッドにも出来る」

「A-140のか・・・試しに1隻造るか？」

「そうだな。・・・こうなるとA-140の縮小版としての形がないな。そうなると3連装3基は必須になる」

「最低限の目標としては金剛型で第二次改装で予定していた性能だな」

「速力30ノット以上で水中防御の強化・・・か」

「後、主砲は伊勢型以下の戦艦と共通にした方がいいな。新開発だと金もかかるし、統制射撃もしやすい。」

「金剛型を新型戦艦と入れ替えたとして14インチ砲84門の一斉射撃か・・・ロマンだな」

「副砲は？」

「金かかりそうだな。止めといたほうがいい」

「基本的に単純な直線にした方がいいな。平甲板とか。後、水中防御は強化すべきだが、あんまり内部構造を複雑にするとまたややこしくなるし時間も食う。」

「防水区画の細分化はなしで、その代わりに装甲を強化すべきってか？」

「電気溶接やブロック工法もいいな。工期も短縮できる」

「強度がやばくないか？」

「いいんじゃない？どうせ実験だし。成功すれば2番艦以降に使えばいい。」

「噂じゃこの戦艦の建造にはヤバイ資金の処理も関わっているみたいだしね」

・・・こうして、造船技官達の考えを基にした新戦艦建造計画は進行し、1936年4月1日

金剛型1番艦の代艦として一隻の戦艦の建造が決定した。

その名を「石鎚」と言う。

この戦艦は当初冷や飯ぐらいを食わされることになるのだが、やがて発生した戦争で最も優れた戦艦として活躍することになるのだが、それを知るものはまだいない・・・。

## 戦艦石鎚 スペック表

基準排水量：35000トン

全長：240メートル

最大幅：28メートル

喫水：9・0メートル

機関：艦本式ギアードタービン 4機4軸

出力：14万馬力

航続距離：18ノットで10000海里

兵装：45口径35・6センチ3連装砲3基9門

40口径12・7センチ連装高角砲6基12門

60口径25ミリ連装機銃8基

艦載機：水偵4機

水観6機

## 造船ヲタ達の憂鬱（後書き）

とりあえず始めなので2話連続で投稿してみましたが、3話目の投稿はちょっと分かりません・・・

主人公は次くらいに出せると思っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3521z/>

---

戦艦石鎚の人々

2011年12月12日00時50分発行